

## 御由緒

太元社には、太元帥明王（たいげんみょうおう）が祀られております。正確な創建時期は不明ですが、四代藩主・伊達綱村公が太元帥明王を本尊とした太元帥明王法の執行を念願としたことが「伊達綱村遺言覚書」に書かれており、御創建の経緯がうかがえます。当宮所蔵の棟札より享保四年（一七一九）十月に国界安全と五代藩主・伊達吉村公の武運長久、子孫繁栄を願い建立されたとありますが、元禄十一年（一六九八）の古図には、拝殿前西側に太元堂の記載があることから、それ以前と推定されており、創建当時は、仏像として祀られ、明治時代の神仏分離により現在の場所に遷されています。

現在の御社殿は、境内社として昭和五十六年八月に竣工したもので、太元帥明王を御神像としてお祀りし、毎年八月一日には、太元社例祭が執り行われます。例祭当日は、厨子の御扉が開かれ、御神像としてお祀りされている「太元帥明王」を間近でお参りすることができます。



太元社 殿内

## 御神徳

御祭神の太元帥明王は古来、鎮護国家・外敵降伏などのお力があるとされ、太元帥明王法という加持祈祷を行い、戦の折には、多くの崇敬を集めておりました。

元々は、古代インドの悪神アータヴァカに由来し、毘沙門天の眷属である八大夜又大将のお一人でありました。毘沙門天が仏教に帰依した事で、眷属も同じく帰依し、悪神アータヴァカは、善神へと変じたといわれています。

現在では、邪鬼を祓い、福を招くとして全国的に篤い崇敬を頂いております。



太元帥像 非公開

## 太元帥像と扁額



太元社に祀られております「太元帥明王」の御神像は、平成九年三月に仙台市の有形文化財として指定を受けました。

像は、全身が茶褐色に塗られた六面八臂（ろくめんはっぴ）の立像です。悪鬼を踏みつけ、八本の腕には、金剛杵（こんごうしよ）、宝棒（ほうぼう）、宝剣（ほうけん）を持っています。眉、口、髭、瞳が金泥で書かれているのみで他に彩色はなく、質実剛健的な非常に力強いお姿です。

厨子には、「享保己亥仲春」と書かれており、享保四年（一七一九）二月に江戸の真福寺にて開眼されたことが、仙台龍寶寺の僧侶・泰音（たいいん）による「青山公治家記録」に記されています。

扁額（へんがく）は、太元社が建立された際に掲げられたものが残っており、額字は、ケヤキの板に彫られ、漆を塗った上に、金箔が押されています。左下に、「明啓」の朱文方印と「得水」の白文方印があり、江戸中期の書家・赤井得水（あかいとくすい）によるものです。得水は、加賀（かが）：現在の石川県）の出身で、江戸、京都などで活躍した書家であり、